

氏名	新田志穂		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	文学		
学位授与番号	博甲第 5246 号		
学位授与の日付	平 27 年 9 月 30 日		
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)		
学位論文の題目	現代ウイグル語の動詞形態論		
論文審査委員	教授 栗林 裕	教授 宮崎 和人	
	准教授 片桐 真澄	准教授 金子 真	

学位論文内容の要旨

本論文は、現代ウイグル語の動詞形態論に関わる現象を広く取り扱ったもので、以下のように序論・本論・結論を含む本編の全 11 章と資料編から構成される。

第 1 章 序論, 第 2 章 現代ウイグル語の文法

第一部 動詞の派生部分

第 3 章 先行研究, 第 4 章 態接辞の形態的派生の方向性, 第 5 章 態と補助動詞

第二部 動詞の屈折部分

第 6 章 先行研究, 第 7 章 形動詞の基本的用法, 第 8 章 形動詞の主節述語における用法

第 9 章 形動詞が伴う主語の格, 第 10 章 形動詞と体言締め文

第 11 章 結論

資料編 (動詞のペアリスト、物語資料)

本論文は全体として、以下の 3 点を研究の目的としている：(1) 通言語学的観点からの現象の考察、(2) 形態論的観点からの現象の考察、(3) 現代ウイグル語の言語データの提示。

第 1 章の序論では本論文の学術的な位置づけを行っている。動詞語幹に近い部分を「派生部分」、語尾や人称・数などを表す部分を「屈折部分」とし、この両面から現代ウイグル語の動詞形態の在り方を探ることを述べている。続く第 2 章で現代ウイグル語の文法の概要を述べている。

第一部は、派生部分、特に態に関するテーマを対象にしている。第 3 章では先行研究のデータについて実証すべき問題点を提起した。第 4 章では、1) 全体的な自他動詞の派生の方向性、2) 動詞のタイプに基づく形態的派生の方向性の違いについて検証を行った。1) に対しては、辞書による全数調査の結果は 0.63% という A/C 比率 (A を C で割ったもの。A は自動詞化、C は他動詞化を意味する) であり、現代ウイグル語の形態的派生の方向性が他動詞化型であることが明示された。2) に関しては、代表的な先行研究である Nichols et al.(2004) にもとづいた有生物動詞・無生物動詞の形態的派生の方向性のうち、後者において他動詞化型と自動詞化型とが拮抗することを示した。さらに本論文ではサンプル数を増やし、問題となっている無生物動詞の形態的派生の方向性を検討した。結果は、A/C 比率が 0.85% で他動詞化型ではあるが、有生物動詞の 0.51 に比べると、低いものと言えるとした。Nichols et al.(2004) 等に加え、

本論文での調査結果を考慮すると、無生物動詞の形態的派生の方向性は、安定した他動詞化型ではないと結論付けた（これらの動詞のペアリストは資料編に収録されている）。第 5 章では、補助動詞に関する考察を行った。一見、補助動詞は動詞の中核部分と関連のないものに思えるが、補助動詞を豊富に用いる現代ウイグル語において、態と補助動詞とが密接に関わることを使役構文と共に論じた。日本語との対照のもとで、両言語における補助動詞と意図性の相関が異なった条件によるものであることを明らかにした。

第二部では、動詞の屈折部分に焦点を移し、現代ウイグル語の形動詞を対象とした統語的事象について取り扱っている。第 6 章と第 7 章は第二部の導入部分であり、第 6 章で現代ウイグル語の先行研究の概観し、従来の研究が形態論的なものに偏っており、統語面からの考察が必要であることを指摘した。第 7 章では本論文で調査の対象とする形動詞化接辞を示し、形動詞が現れる統語的位置ごとに基本的用例を整理して示した。第 8 章では、主節主語に現れる形動詞の用法について考察し、1) 形容詞名詞型の言語である現代ウイグル語では、形動詞形による言い切りが普通に行われる、2) 形動詞形が主節述語に位置する場合、定動詞形が主節述語に位置する場合との違いはエヴィデンシャリティの違いに関わっているという 2 点の予測を立ててその実態を検証した。その結果、形動詞はその多機能性から名詞修飾節述語・名詞節述語・副詞節述語・主節述語といった様々な統語的位置に現れることが指摘されているが、実際の用法においては分布に偏りがあり、主節述語に現れるものは決して多いとは言えないこと、またエヴィデンシャリティを表すとまでは言えないにせよ、主節述語に現れる形動詞の中には、感嘆や反語など平叙文以外において用いられることを明らかにした。第 9 章では形動詞の伴う主語の格（主格もしくは属格）が何によって決定されるかということ論じ、考察対象が限定されていた先行研究よりも分析対象を広げつつ統語的な要因にも着目し考察を行った。その結果、一貫して主格主語が現れる節と、主格主語と属格主語とが混在している節があり、その違いが主節主語とどのような関係を持つかという違いにあることを明らかにした。また名詞節において、格の選択が形動詞とその主語との隣接性や主節主語との混同の回避という点からなされており、必ずしも意味的特徴に拠るわけではないということを示した。第 10 章では他言語における報告をもとに現代ウイグル語における所有接辞の用法を示し、それらが句接辞に相当するものであることを指摘した。このような接辞の振る舞いは特異であるとされているが、句接辞という観点から捉えることで一貫した説明が可能になることを示した。さらにこれらの話題を発展させ、日本語における体言締め文（人魚構文）が現代ウイグル語の形動詞による構文との比較のもとで一般言語学的にいかにつまえることができるかを論じた。第 11 章の結論では、第一部・第二部の総括を行った。

論文審査結果の要旨

新田志穂氏が提出した学位請求論文「現代ウイグル語の動詞形態論」に関する学位論文審査会は、2015年7月14日（火）18時より19時15分まで一号館5階524言語系セミナー室で行われた。学位論文審査委員会は、栗林裕（主査：言語学）、片桐真澄（言語学）、金子真（フランス語学）、宮崎和人（日本語学）の各教員で構成された。

初めに新田志穂氏自身が論文の要旨を述べた後、個々の審査委員から論文の具体的な記述に関わる質問やコメントが出され、最後に全体的な内容についての質問およびコメントが出された。

本論文は現代ウイグル語の動詞形態論に関わる言語現象を広く取り扱っており、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、序論・本論・結論の本編からなる全11章と、巻末の資料編から構成される（総頁数 A4判270頁）。研究成果は以下のように、外部の客観的な審査を経ている：日本言語学会（2回）、関西言語学会（1回）、国立国語研究所（1回）、査読付き学会誌（2本）、査読付き書籍の分担執筆（共著）（1本）。

従来の現代ウイグル語の研究は、形態論を中心としたものが多くみられ、他言語との対照研究にしても、特定の言語との比較に限定されてきた。このような背景から、本論文では次の3点を目的として掲げ、現代ウイグル語の文法現象を記述・考察したものである。すなわち、(1) 通言語的な観点からの現象の考察、(2) 統語論的な観点からの現象の考察、(3) 現代ウイグル語の言語データの提示、である。本論文でのこれら3点の目的に対する対応を示すと、(1)の通言語的な観点からの考察は、第一部とのつながりが大きく、言語学において先駆的かつ通言語的観点からの研究をもとにしたことで、現代ウイグル語の位置づけを明らかにした。チュルク諸語内における異同を知る点でも、第一部の研究の意義は大きいと言える。また、(2)の統語論的な観点からの考察は、主に第二部の第8章～第10章に盛り込まれている。特に10章では、「特異」とされてきた諸現象を、一般言語学的に説明することを試みた点で、(1)の目的も果たしているものである。(3)の言語データの提示については、本論文全体および資料編を通じて行われている。いずれも母語話者から採集した実例や物語テキストの実例から収集されており、質の保障された言語データである。加えて、第一部の中型辞書一冊を全数調査した動詞対738組のリストと、本論中の例文の一部は資料編（アラビア文字表記のウイグル語の物語テキスト計24話の翻字）に収録されており、相互参照することが可能である。このように本論文の主要な目的は概ね達成できたと判断することが出来る。特に本研究の意義は、チュルク系の諸言語の中でも、トルコ語と比較すれば研究が十分進んでいない言語であるウイグル語について、信頼できる言語データを提供することが出来た点にあると言える。

審査委員からの意見としては主に次のようなものであった。動詞形態論というタイトルであるが、取り上げられているのはその一側面の言語現象であり、内容に若干の偏りがあること。興味深い言語データの提示がなされており、その一部はチュルク諸語を超えた一般言語理論への貢献が見込めること。文法用語の使用に、齟齬がみられる箇所があるので正していかなければならないことなどが指摘された。

審査委員会は、新田志穂氏の学位請求論文には若干の課題はあるものの、その研究成果の意義を認め、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると全員一致での結論とした。